鹿児島女子短期大学紀要
第50号（2015）67～76頁

幼稚園教育実習の実態とキャリア教育の検討

A Survey of Teaching Practice in Kindergarten and Study of Career Education in Pre-school Education Courses

坪　井　敏　純
Toshisumi Tsuboi

鹿児島女子短期大学

２度目の幼稚園実習において，実習園での事前指導については，実習日程や方法などが不明のまま実習に入っている学生が30％を超え，配当クラスも未定の学生が20％近くいる．また指導者に対する評価は高く，90％以上の学生が手本となる教員に出会ったと回答している．保育者としての就職希望者は入学時から10％程度減少しており，15％以上の学生が保育者としての自信を無くしたり，適性に疑問を持っており，保育者としての適性がないと感じている学生でも，13％が保育者として仕事をしたいと望んでいる．さらに保育職につきたくないという理由を探ってみると，必ずしも実習によって自信を失ったり，不適切な指導や，子どもが嫌いになったといったことが原因ではないことが示唆された．キャリア教育を進めるうえで職業選択の混乱が見られることから，学生指導の在り方を見直す必要があろう．

キーワード：幼稚園教育実習・キャリア教育・事前指導・保育者としての適性・職業選択

はじめに

幼稚園教諭と保育士を養成している２年生の養成校（短期大学・専修学校）では，ほとんどの学生が入学時には将来の職業として幼稚園教諭または保育士を目指している．そのためキャリア教育はすでに職業選択を終えた初期の学生を対象に行われることになる．ところがこの職業選択は多くは高校卒業時での選択であって，入学時から実際の保育現場を経験し学習を始めることで，自己の見直しを迫られることになり，そこには自己同一性の揺らぎや混乱を伴うことになる．本研究はこのような実習を終えた学生の職業選択の実態とその揺らぎを探ることが目的である．

さて，保育士・幼稚園教諭の養成課程における教育実習・保育実習は，キャリア教育の中の重要な位置を占めるものである．一般企業等の職業体験としてのインターンシップと同様の経験と考えられがちであるが，免許・資格の取得という単なる経験以上の意味を持ち，職業選択において決定的な重みを持つものである．

また，多くのキャリア教育のプロセスでは，職業選択は自己理解・自己分析を行い，働く目的を考え，将来の職業を思い描きながら，それに必要な経験や能力を身につけ，具体的な希望の職種・職業あるいは企業の選択と進んでいく．一般に多くの大学では特定の職種や専門職を決めて入学する学生は少ない．特に文系はその傾向は顕著である．

このような大学を想定したキャリア教育に対して，職業教育を中心とした短期大学では独自の問題が存在するのである．決定的な違いは，大半の学生が入学時に幼稚園教諭・保育士資格（以後は，保育者と称す）を取得し，はっきりとした職業を将来の夢として掲げているのである．もちろん職種は幼稚園教諭であり保育士（保育所）という職業である．つまり本学入学前に職種を決定し，その職業教育を受けるために入学しており，短期大学におけるキャリア教育は，この時点から始まるといってよい．

そのため保育者を養成する養成校では，保育者になることを前提とした教育が行われることになる．しかし，保育者養成に携わってみると，その点について大きな問題をはらんでいることがわかる．それは入学時の職業選択は，はっきりとした自己分析と実体験に裏付けられた選択ではない点が一番に挙げられる．あるいは漠然とした「子どもが好きだから」という進路選択，親に強く勧められた，場合によってはよく考えないで入学したなどの不本意入学の学生も少なくない．もちろん高校を卒業したばかりの学生が将来を見据えた職業選択ができるわけではないし，とりあえず一つの選択をして歩き始めたばかりで，これから自己の適性を判断し，職業理解を深め，人生設計を考えることになる．つまり保育者養成校に入学したからといって，人生を決めてきたわけではない．

ところがそのような実態とは裏腹に，保育者養成のための授業が展開され，実習に追いまくられて，立ち止まる余裕もなく，何とかこなしていく日々が続いていく．つまり勉強すれば単位は取れていくし，よほどのことがなければ実習も言

われた範囲のことはできてしまうのである．しかし，授業を受け，実習を体験する中で，自分の選んだ保育者としての将来像に疑問を抱く学生は少なくない．保育者養成のキャリア教育に欠かせない視点は，一度決めた職業選択を見直していく過程に寄り添い，将来像を再構築するという作業が含まれているという点である．そこでは職業が未決定で悩むのに比べ，一旦決めた自分の道を見直す作業は，自己同一性の混乱を生み出す可能性がある．それはかなりな心理的ストレスがかかることは容易に想像できる．

本研究は幼稚園教諭・保育士を目指す学生が，このような職業選択や将来像の見直しに揺れ動く学生の実態を把握するために，２度目の幼稚園教育実習Ⅱ[1]の終了時を選び，アンケートを実施した．この時期を選んだのは，幼児との関わりが多くなる実習であり，自己の判断が多く求められる参加実習や担当実習の経験によって，本人の職業適性や職業としての保育者に対する理解が，実体験を通して深まると考えられるからである．

以上のように，この研究は学生の就職や職業選択について，今後のキャリア教育の方向にヒントを得ることを目的としているが，同時に調査内容は幼稚園教育実習Ⅱの実態を把握する資料ともなることから，附属幼稚園以外の一般幼稚園の実習の実態と進路選択の関係を分析し，一般幼稚園実習に向けて，事前指導・事後指導のあり方も探る目的がある．

対象

鹿児島女子短期大学児童教育学科小幼コースと幼保コースの２年生（241人）

方法

アンケート項目は幼稚園教育実習Ⅱに関して，実習園による事前指導に関する事項と進路選択に関する事項を中心に質問事項を選択した．なお質問には職業選択として「幼稚園教諭・保育士」という選択肢になっているが，保育所実習Ⅰ[2]を幼稚園教育実習Ⅱの前に経験しておりに，幼稚園教諭にだけ限定することは保育に携わる職業として尋ねるには不適切と考えられるためである．

実施時期は平成26年10月初旬から中旬に，授業中に配布し，学生は持ち帰ったあと１週間後に回収した．回収率77.2%（186/241）

なお，アンケートの実施時期が実習後３ヶ月あまりたっており，直後の意識ではないことがどのような影響を与えるのか定かではなく，結果の考察には十分な注意が必要と思われる．

結果と考察

１．調査対象者

表１は回答者数と学生の総数である．回収率は77.2%であった．

表１　調査対象者

所属コース	回答者数	対象者総数
小幼	9	16
幼保	177	225
合計	186	241

２．幼稚園から受けた事前指導の実態

表２は，実習の打ち合わせなどで，研究保育（評価保育）を実施するにあたって，事前に計画を立てるように指示された学生の割合である．指導案の作成は，実習の事前準備の中心的な保育計画であり，教材研究でもあることから，実習期間に入って初めて検討するのでは時間的に余裕が持てないように思われる．園側からの指示がなくても，学生にはいくつかの案を用意するように指導することが必要だと思われるが，表３にあるように配属されるクラスが決まっていない学生が 1/5 ほどいるため，難しい点がある．

---

[1] 本学では幼稚園教育実習を１年後期に附属幼稚園で２週間，２年前期に一般幼稚園で２週間行っている．コースによって６月と９月のどちらかに参加する．この二つの実習の間に保育実習（保育所実習Ⅰ）が行われており，１年生で幼稚園教育実習と保育所実習を経験することになる．

[2] １年次の２月に実施している．

表２　実習前に指導案を書くように指示されましたか

はい	52.7%
いいえ	45.7%
不明	1.16%
合計	100%

３．事前打ち合わせの内容

表３は，実習前に行う打ち合わせに関する内容である．気になるところは，「実習期間中の日程」を 1/3 の学生が知らされていない．また配当されるクラスも20%弱が未定のまま実習を迎えている．日程がはっきりしないために，具体的な準備が難しく，実習方法も指示されない学生が 1/3 もおり，実習初日の混乱が心配なところである．また担当保育も未定のまま半数近くの学生が実習に入ってしまっている．そのため，突然担当保育を言い渡されるケースが 1/4 見られる（表４）．日程の説明がいつ行われているのかを尋ねていないため，指導の状況はっきりしないが，本学が求めている最低限共通した実習内容のチェックリストを示すことが，逆に園の実習計画の作成の助けになるのではないかと思われる．

また，日誌の書き方や，観察の仕方などの説明も割合としては少ないが，これまでの実習生の受け入れ実績がある園では，本学が指導している内容で問題がなければ説明する必要がない場合もあるであろう．それは指導案の書き方にも言えることで，「はい」の割合が少ない点はそれほど問題ならないかもしれない．

表３　実習前に具体的な説明や指導があったかどうか

質問	はい	いいえ	不明
準備すべき物	95.7%	4.3%	0.0%
実習期間中の日程の説明	63.4%	34.9%	1.6%
配置されるクラス	81.2%	18.8%	0.0%
実習方法（観察・参加・担当実習の仕方や子どもとの関わり方など）	64.5%	35.5%	0.0%
評価保育以外の担当保育の内容や日程	54.8%	45.2%	0.0%
日誌の書き方	32.3%	67.7%	0.0%
観察の仕方	38.2%	61.8%	0.0%
指導案の書き方	41.4%	58.6%	0.0%
評価保育（研究保育）の日程や内容	71.0%	29.0%	0.0%
プレゼントやお別れ会	59.7%	39.8%	0.5%

４．実習中に苦労したり，悩んだこと

表４は実習中に悩んだことや苦労したことの質問への回答である．この実習までに幼稚園教育実習Ｉと保育所実習Ｉを経験しており，実習の仕方については戸惑うことは少ないと思われる．「はい」の割合が比較的多い「障害児への援助」や「指導案」は経験がまだ浅いこともありやむを得ないところである．

気になるケースは「担当保育の回数が多い；16.7%」や「突然，担当保育を任された；24.7%」，10%前後の学生が，「職員間で指導方針が違う」，「退出時間がはっきりしない」などと回答している．特に担当保育が日程的に計画性のない状況があるのであれば，かなり問題であろう．

表４　実習中に悩んだことや苦労したこと

質問	いいえ	どちらともいえない	はい	不明
実習園の教育・保育方針が合わない	72.6%	22.6%	4.3%	0.5%
障害児への援助の仕方が難しい	37.6%	39.2%	22.6%	0.5%
指導案の作成	24.7%	24.2%	50.0%	1.1%
研究保育以外に，担当保育が多すぎて，対応するのが難しかった	59.7%	23.7%	16.7%	0.0%
突然，担当保育を任された	62.9%	12.4%	24.7%	0.0%
わからないことを質問しにくい雰囲気	77.4%	14.5%	7.0%	1.1%
実習生に対する指導方針や内容が職員によって違う	78.0%	12.9%	9.1%	0.0%
日誌の書き方が園独自なもので，慣れるのに苦労した	75.3%	16.7%	8.1%	0.0%
退出時間がはっきりせず，帰れないような雰囲気があった	71.0%	17.7%	11.3%	0.0%

５．実習中に行われる，毎日の反省会について

表５は反省会についての回答結果である．毎日行っている園が81.2%で，ほとんどの園で行われているが，しかし「時々」が4.8%，あるいは「ほとんどない」が10%，「実習日程にない」というケースも2.7%あり，実習園として適切であるかどうか問題である．反省会が行われているケースでは，その時間は30分～60分が40%を占めており，大半が30分程度と見て良いであろう．

反省会が役立ったかという問いに対して，「どちらとも言えない」「やや役に立たなかった」「役に立たなかった」を足すと６%で10人程度の学生は教員の指導に対して否定的な意見を持っている．

表５　反省会

反省会の頻度	毎日	時々	ほとんどない	計画に設定されていない	不明
(%)	81.2%	4.8%	10.2%	2.7%	1.1%
反省会の時間	１時間	３０分	３０分未満	日によって異なる	不明
(%)	15.1%	40.9%	21.5%	20.4%	2.2%
反省会の指導内容	役立った	やや役立った	どちらとも言えない	やや役立たない	役立たない
(%)	81.2%	12.9%	3.2%	0.5%	2.2%

６．実習の指導者について

表６は幼稚園内の指導者についての質問である．実習中の指導者が一人に特定されているケースと（一つのクラスだけに配属されているケース），クラスをローテーションして実際の指導はそのクラスの担任になっているようなケースがあるため，指導者が複数考えられる．従って，複数の指導者も含めて，保育に関わる指導を頂いた教員をすべて含む回答にしている．

最も注目すべき点は，「手本となる幼稚園教諭との出会いがあった」が90%を超える割合を示した点である．今回の幼稚園教育実習が，学生に成長の目標を与えており，幼児教育に対する理解を深めた実習であったことが伺える．それは指導者が熱心に学生を指導しており（93%），これが自ら指導者になった時に生かせる経験になるといえよう．

ただ，「指導者の指導内容が理解できない」が12.9%おり，10人を超える学生が「人格の否定」，「保育への批判」が繰り返されており，人間関係では「指導者との人間関係」に15.1%の学生が，「職員間との関わり」に22.0%の学生が悩んでいる．この「職員間の関わり」については，職員間の人間関係が良くなく，グループに分かれて対立しているようなケースが複数報告されている．

表６　指導者について

質問	はい	いいえ	不明
手本となる幼稚園教諭・保育士との出会いがあった	90.9%	7.5%	1.6%
指導者の指導内容が理解できない	12.9%	84.9%	2.1%
幼児への不適切な対応をする職員がいた	7.0%	91.9%	1.0%
指導者は熱心で，しっかりと教えていただいた	93.0%	4.3%	2.7%
自分の人格を否定されるような発言が繰り返された	8.1%	89.2%	2.7%
短大に対する批判	7.0%	90.9%	2.1%
指導者への親しみを感じた	80.1%	18.3%	1.6%
職員間との関わり方が難しかった	22.0%	76.3%	1.6%
指導者との人間関係が難しかった	15.1%	83.3%	1.6%
仕事へのやりがいや素晴らしさを話していただいた	74.7%	23.7%	1.6%
自分の保育に対して，否定的な評価が繰り返された	9.7%	88.2%	2.1%

７．実習園を後輩に実習先として勧めたいか

表７は，実習先として，実習生自身が後輩に勧めたいかどうかを尋ねている．積極的に「勧めたい」という園が半数を

超え，「やや勧めたい」を含めて77.9％と，約８割の学生が勧めるという意見であった．実習依頼をするうえで気になる点は，特に「勧めたくない・やや勧めたくない」が合わせて7.5％で，「どちらともいえない」を合わせると，勧める気持ちが勧めたい気持ちを上回らない学生が22.0％になっている．なぜ，実習先として推薦しないのかについては，別に分析する予定である．

表７　実習先として推薦

回答	%	人数
勧めたい	53.2%	144
やや勧めたい	24.7%	
どちらとも言えない	14.5%	26
やや勧めたくない	4.8%	15
勧めたくない	2.7%	

８．入学時と実習終了時での幼稚園教諭・保育士としての就職希望

表８は入学時と実習終了時の幼稚園教諭・保育士（以後，保育者と略す）になりたいと思っていたかどうかの比較である．実習後については，意識の傾向をはっきりさせるために「どちらともいえない」は選択肢にない．

幼稚園教育実習Ⅱは幼稚園教育実習Ⅰと保育所実習Ⅰを経験した後の実習であるため，今回の実習の直接的な影響を見ることはできないが，この時期の実態を知ることはできる．実習後は入学時に比べ，幼稚園教諭・保育士を「希望していた」学生が15％程度減少し，強い希望が薄らぎ，希望しない方向に傾いている．

入学時点ですでに，希望していない学生が7.5％（およそ14人）いるが，それが30人程度（16.1％）に増え，２倍になっている．実習が職業選択の最も重要な役割を果たすが，有能感の減少を指摘する研究もあるが（森野・他，2011），おそらく原因はかなり複合的だと思われる．

表８　幼稚園教諭・保育士への希望

回答	入学時	実習後
希望していない	4.3%	5.9%
どちらかといえば希望していない	3.2%	10.2%
どちらとも言えない	6.5%	
どちらかといえば希望していた	8.1%	16.1%
希望していた	76.9%	59.1%
不明	1.1%	8.6%

９．入学時から実習終了後に至る保育者希望の個人の変化

表９は表８の変化を，個人レベルで入学後と実習後の希望の変化を見たものである．傾向を見やすくするために「希望している」と「どちらかといえば希望していない」を「希望している」に，「希望していない」と「どちらかといえば希望してない」を「希望していない」として示している．

実習後希望していない学生（29名）のうち16名は入学時には，幼稚園・保育士を希望していた学生である．入学時に「希望している（157人）」学生の10.2％が「希望しない」に変化しているのである．逆に入学時には希望していなかった学生14人のうち６人が（42.9％）希望すると答えており，「どちらとも言えない」としていた学生（12人）のうち７人（58.3％）が「希望する」に変化しており，このような変化の原因は，明らかではないが，学生指導上調査する必要があろう．なぜなら短期大学の場合は，職業選択は入学時から迫られており，本人の意思が不明確なまま免許・資格の取得が

表９　入学時の幼稚園教諭・保育士の選択の変化

	実習後の幼稚園教諭・保育士の選択（人数）			
入学時の幼稚園教諭・保育士の選択	希望していない	希望している	不明	総計
希望していない	8	6	0	14
どちらともいえない	5	7		12
希望している	16	126	15	157
総計	29	139	15	183

優先される状況で，キャリア形成のストレスはかなり大きい．特に将来像の変化や現実と自己の欲求との乖離は不適応の原因にもなり，より丁寧な学生指導が求められるといえよう．

10. 実習で学んだこと

表10は幼稚園実習で得たもの，学んだものを尋ねた結果であるが，保育実習をすでに経験しており，それと分けて回答することは，難しいように思える．そのため，このアンケート実施時点での実態として理解しておくことが妥当であろう．

では，得たもので強く感じているものとしては，「笑顔やあいさつなど，マナーの重要性が分かった」76.9%，「幼児教育・保育の重要性を認識した」70.4%，「幼稚園教諭・保育士という仕事の素晴らしさを感じた」65.1%，「手本となる保育者との出会いがあった」60.8%（表６に同じ質問があるが，「はい・いいえ」の選択肢が影響して90%以上の回答となったものと思われる．そのため「どちらかといえばそう思う」を加えると，表６に近い値となる），「自分の良さや，足らないところを再発見した」68.8%，「環境作りの大切さが実感としてわかった」61.3%などを上げることができる．

（１）保育者としての資質

表11の「自分には幼稚園教諭・保育士の先生は向いていないと思った」が，「どちらともいえない（26.9%）」を含めて，そう思うと回答した学生が44.3%に達している．ただ，「幼稚園教諭・保育士になりたいと思わなくなった」は「どちらともいえない」を含めて22.3%とそれほど高くなく，「幼稚園教諭・保育士のやりがいや生きがいを感じることができた」は77.4%が感じている．さらに「幼稚園教諭・保育士という仕事の素晴らしさを感じた」は86.6%が感じており，「子どもがかわいいとは思えなくなった」は，「そう思う・どちらかといえば，そう思う」を含めてもわずか1.6%である．

結局，幼児教育に対するあこがれややりがいを多くの学生が感じて実習を終えているが，実際の保育を実践してみて思い通りに，あるいは理想とする保育の実践ができず，自己の資質に疑いを持って帰ってくる学生が多いということであろう．

表10　実習で得たこと感じたこと

質問	そう思わない	どちらかといえば，そう思わない	どちらともいえない	どちらかといえば，そう思う	そう思う	不明
笑顔やあいさつなど，マナーの重要性が分かった	3.2%	0.5%	1.1%	15.6%	76.9%	2.7%
幼児教育・保育の重要性を認識した	3.2%	2.2%	1.1%	21.5%	70.4%	1.6%
幼稚園教諭・保育士のイメージが悪くなった	72.0%	8.6%	11.3%	4.3%	3.2%	0.5%
幼稚園教諭・保育士としての自覚が持てた	4.3%	4.3%	14.5%	37.6%	38.7%	0.5%
自分には幼稚園教諭・保育士の先生は向いていないと思った	18.8%	35.5%	26.9%	13.4%	4.3%	1.1%
幼稚園教諭・保育士という仕事の素晴らしさを感じた	2.7%	2.7%	7.0%	21.5%	65.1%	1.1%
手本となる保育者との出会いがあった	3.8%	2.2%	9.1%	23.1%	60.8%	1.1%
幼児の素晴らしさや，ものの見方，考え方がつかめた	2.2%	2.7%	6.5%	42.5%	46.2%	0.0%
環境作りの大切さが実感としてわかった	2.2%	2.2%	2.7%	31.7%	61.3%	0.0%
幼稚園教諭・保育士のやりがいや生きがいを感じることができた	2.7%	3.2%	8.6%	29.0%	56.5%	0.0%
やればできるという自信を得ることができた	3.2%	2.2%	14.0%	38.7%	41.9%	0.0%
子どもがかわいいとは思えなくなった	84.9%	9.7%	3.8%	0.0%	1.6%	0.0%
幼稚園教諭・保育士になる自信がなくなった	34.9%	24.7%	24.7%	12.4%	3.2%	0.0%
自分の良さや，足らないところを再発見した	1.6%	3.2%	4.3%	22.0%	68.8%	0.0%
幼稚園教諭・保育士として仕事をしたいという気持ちを確認できた	4.3%	5.9%	18.8%	21.0%	49.5%	0.5%
幼稚園教諭・保育士になりたいと思わなくなった	66.7%	9.1%	12.9%	5.9%	3.8%	1.6%

（２）保育者には向いていないけれど，保育者を希望する？

表11では実習後に自分は「保育者として向いているかどうか」「自分には幼稚園教諭・保育士の先生は向いていないと思った」という学生が「幼稚園教諭・保育士」を選択しているという判断と，「保育者になりたいと思うかどうか」の関

連を見たものである．表では「希望していない・どちらかといえば希望していない」を「希望していない」に，「希望していた・どちらかといえば希望していた」を「希望していた」にして，込みにして示している．

希望している学生のうち，はっきりと「そう思わない」と回答した学生は59.4%（82/138）であるが，希望しない学生が「そう思わない」と回答した割合は23.3%（7/30）で，確かに保育者に向いているかどうかの判断は，職業選択に大きく影響していると言える．しかし，希望していると答えた学生の40.6%は「どちらとも言えない・そう思う（38＋18人）」と答え，向いていないという学生（18名）が保育者を希望しているという点は見過ごせない（13.0%）．

表11　実習後の進路と資質（人数）

	自分には幼稚園教諭・保育士の先生は向いていないと思った			
実習後の幼稚園教諭・保育士の選択	そう思わない	どちらともいえない	そう思う	総計
希望していない	7	9	14	30
希望している	82	38	18	138
不明	11	3	1	15
総計	100	50	33	183

11．保育者に向いていないと感じた学生の実習体験内容

では，「保育者に向いていないと」いう判断と実習の経験をいくつか検討してみる．

（1）実習で得た自信

表12は「向いていない（33名）のうち，「やればできるという自信を得ることができた（22名）」の割合は66.7%，「向いているかどうか，どちらともいえない（50名）」の学生は35人が自信を得たと回答しており，「向いていない」学生とほぼ同じ割合を示している（70.0%）．

さらに「向いている（101名）」のうち「自信を得ることができた（59名）」の割合は91.1%であった．「向いていない」と判断した学生でも，実習をやり終えた点については，66.7%の学生がその経験が自信になっているようである．「向いている」といいう判断した学生にとっては，ほぼ全員（91.1%）が「やればできる」という自信を得てきている．

結局，保育者には向いていないと感じている学生でも，70%近くがやればできるという自信を得ており，実習体験が努力と成果に結びついていると見ることができる．ただし，「向いている」と思っている学生のうち６名が自信を得ることができていない．このような学生を早く発見して，実習中の体験等を聴き，相談に乗る必要があろう．

表12　保育者としての資質と実習で得た自信（人数）

	やればできるという自信を得ることができた			
自分には幼稚園教諭・保育士の先生は向いていないと思った	そう思わない・どちらかといえば，そう思わない	どちらともいえない	そう思う・どちらかといえば，そう思う	総計
どちらかといえばそう思わない・そう思わない	6	3	92	101
どちらとも言えない	2	13	35	50
どちらかといえばそう思う・そう思う	2	9	22	33
総計	10	25	149	184

（2）保育者としての資質と子どもへの感情

「向いていない（33人）」のうち，子どもがかわいく思えない（２人）」と答えた割合は6.1%と極めて少なく，「どちらともいえない」においても12%に過ぎない．「向いている」かどうかの問題は，子どもとの関係はその要因とは考えにくく，「保育者に向いていない」という判断をしている学生でも，子どもとのかかわりに対して否定的ではない．

表13　保育者としての資質と子どもへの感情（人数）

	子どもがかわいいとは思えなくなった			
自分には幼稚園教諭・保育士の先生は向いていないと思った	そう思わない	どちらとも言えない	そう思う	総計
そう思わない・どちらかといえばそう思わない	100	1	0	101
どちらとも言えない	47	2	1	50
そう思う・どちらかといえばそう思う	27	4	2	33
総計	174	7	3	184

（3）保育者としての資質と実際の保育の評価

では，実際に行った自分の保育に関して受けた評価の影響はどうであろうか．18名の学生が自分の保育に対して否定的な評価が繰り返されたと回答している．特に，「向いていない」と判断している学生だけを取り出してみると18.6%（6/32）の学生が否定的な評価を受けており，この否定的評価は「どちらでもない」学生では14.3%，「向いている」学生の中では5.1%となっている．もちろん否定的な評価の結果として，保育への向き不向きを判断するという可能性もあるが，「向いていない」と感じている学生に対して，否定的な評価が行われている可能性もあり，その因果関係はこの結果では明らかにはならない．

表14　保育者としての資質と実際の保育の評価（人数）

	自分の保育に対して，否定的な評価が繰り返された		
自分には幼稚園教諭・保育士の先生は向いていないと思った	はい	いいえ	総計
どちらかといえばそう思わない・そう思わない	5	94	99
どちらとも言えない	7	42	49
どちらかといえばそう思う・そう思う	6	26	32
総計	18	162	180

12. 保育職に就きたい気持ちと実習体験

次に，保育者として働くことを希望するかどうかという点と実習経験の関係を見てみることにする．

（1）保育者との出会い

保育者になりたいと思ったかどうかと，手本となる保育者との出会いの関係を示したのが表15である．「なりたい」という学生の95.0%は，「出会いがあった」と答えており，「どちらともいえない」学生でも91.3%が，出会いがあったと答えている．「なりたいとは思えなくなった」学生でも77.8%が，出会いがあったと回答している．この結果は指導者の不適切な指導が保育職に対する期待を失わせた要因とは考えにくい（個々のレベルでは可能性は否定できないが）．

保育者への希望が薄らいだ学生でも，職業人としての手本であり，保育の手本である人物との出会いを感じている点は，キャリア形成に役立つ体験ではないだろうか．

表15　保育職への就職希望と実習指導者

	手本となる幼稚園教諭・保育士との出会いがあった		
幼稚園教諭・保育士になりたいと思えなくなった	はい	いいえ	総計
そう思わない・どちらかといえばそう思わない	132	7	139
どちらともいえない	21	2	23
そう思う・どちらかといえばそう思う	14	4	18
総計	167	13	180

（2）　保育職への希望と不適切な指導者の対応

保育者になる希望を持っているかどうかと，実習中に「自分の人格を否定されるような発言が繰り返された」経験との関係を示したものが表16である．確かに保育者を希望しない学生の中で16.6%（3/18）が否定的な発言を受けており，希望する学生の5.8%よりは多いが，希望しない学の生の度数が少ないため比較するには適当ではない．従って，保育職への希望に対する指導者の不適切な対応が影響するかどうかについては明確ではないが，学生にとってショックであり，実習の継続に困難をきたすが，一部の学生へのインタビューではこのような対応をする職員への憎悪や嫌悪感があるものの，

保育職そのものへの期待が薄らぐものにはなっていないように思える．

表16　保育職への希望と不適切な指導者の対応

	自分の人格を否定されるような発言が繰り返された		
幼稚園教諭・保育士になりたいと思えなくなった	はい	いいえ	総計
そう思わない・どちらかといえばそう思わない	8	131	139
どちらともいえない	4	17	21
そう思う・どちらかといえばそう思う	3	15	18
総計	15	163	178

（３）　保育職への選択と子どもへの感情

表17は，保育職を選択するかどうかと子どもへの感情の関係を示したものである．

保育者になるかならないかの選択には，「子どもがかわいいと思うかどうか」は，ほとんど関連していない．「子どもがかわいくない」と感じている学生はわずか３人であり，短大入学時点で「子どもが好き」（斎藤・松嵜・三浦，2006）という動機が入学を決定づけていることもある．また，この実習までに，保育者になる動機づけが薄らいだ学生は，実習不参加や休学・退学を選択しているという点は考慮しておく必要がある．

表17　保育職への選択と子どもへの感情

	子どもがかわいいとは思えなくなった			
実習後の幼稚園教諭・保育士の選択	そう思わない・どちらかといえば，そう思わない	どちらともいえない	そう思う・どちらかといえば，そう思う	総計
希望していない・どちらかといえば希望していない	27	1	2	30
希望していた・どちらかといえば希望していた	134	5	1	140
不明	14	1		15
総計	175	7	3	185

結論とまとめ

幼稚園教育実習Ⅱ（２年６月期と９月期）の事前打ち合わせでは，指導案を準備するように指示されている学生は50％を超えているが，日程の説明は 1/3 が受けておらず，配当されるクラスも決まっていない学生が20％近くいる．また実習形態（方法）の説明も 1/3 が受けておらず，実習初日から学生が判断するような状況が予想され，混乱が心配である．事前打ち合わせが，かなり早い時期に行われているケースもあり，日程の調整などがまだ難しいなどの理由も考えられるが，できれば実習にスムーズに入っていけるためにも，園側の協力をお願いしたいところである．

実習中の苦労や悩みの中に，突然担当保育を任されるというケースが 1/4 もあることは，改善をお願いしなければならないのではないか．それ以外については，全体としては問題は少ないと思われるが，個別のケースについての対応は必要であろう．

次に実習指導者に関しては，「手本となる保育者との出会いがあった」と回答した学生が90％を超えており，最も重要な実習の成果が上がっていると言える．指導された先生方にはただただ感謝しかない．不適切な事例も散見されるが，これについては学生に個別に聞き取り対応することが必要であろう．

保育者として将来仕事をしたいという希望は，入学当初から10％程度減少する．入学時には保育者として働く希望を持っていた学生のうち16名の学生はその希望を持たなくなっている．保育士や幼稚園教諭の養成校にいながら，希望しない勉学を続けることは，それなりの気持ちの整理が必要である．さらに言えば希望しない26人の学生に対するキャリア教育のあり方も考えなければならない．個別の事情を勘案して，その進路選択に対する彼らへの相談（カウンセリング）が必要である．

実習で感じたことや得たことの中に，保育者として働きたいと希望する学生の中に，13.0％の学生が自分は保育者には向いていないと判断している．このような矛盾した選択をしている学生の事情がどのようなものであるかを知ることは必

要であり，自己同一性の形成に困難を抱えていると思われる．

自分は保育者として向いていないと判断している学生は33名いるが，実習体験との関連でみると，向いていると回答した学生との大きな違いは，あまりないように思える．人数が少ないためその差に関しては，結論は出しにくいが，「実習で得た自信」はやや低く，保育に対して否定される割合はやや高い．しかし，子どもに対する気持ち（可愛い）は同じである．つまり子どもは好きだけれど，保育者という職業には向いていないという判断であろうか．結局，実習におけるマイナスの体験は，保育者としての道を閉ざす決定的な要因となっていないのではないかと考えられる．つまり，その園や指導者が問題なのであって，職業としての保育者希望を覆すことはないということであろうか．もちろんプラスの体験は職業選択には有益ではあるが，保育者を希望しない学生でも，表15に見られるよう80％弱の学生が手本となる教員との出会いがあったと回答している．また，幼稚園へ就職することを望んでいた学生が保育園に変化したり，その逆も少なくないことから，保育者としての道が閉ざされるというわけではなく，職業選択の幅があるメリットは見逃せない．

以上の結果から，特にキャリア教育という点から実習を見直すためには，保育者養成校における目的と学生の意識との乖離をどのように埋めていくかということと，あるいはその乖離から新しい進路選択に結び付けていくなど，学生の自己同一性の混乱に対する相談支援の体制作りが求められているのではないだろうか．もちろんそこには学生自身の問題や（自己分析の不適切さや能力の問題など）だけでなく，保護者と学生の進路に対する意見に隔たりがあるといった問題も含まれており，対応が難しいケースがあることも確かである．

参考文献

中央教育審議会（答申）2015　「今後の学校におけるキャリア教育・職業教育の在り方について」

国立大学協会　教育・学生委員会　2005　「大学におけるキャリア教育のあり方－キャリア教育科目を中心に－」

森野美央・飯牟礼悦子・浜崎隆司・岡本かおり・吉田美奈　2011　「保育者効力感の変化に関する影響要因の縦断的検討」，保育学研究，49,2，96-107

齋藤多江子・松嵜洋子・三溝千景　2006　保育学生の理想とする保育者像について―短期大学生と大学生における課題意識をめぐって―　保育士養成研究，24,11-18

加藤麻里恵　2009　保育者養成大学生における進学動機，就職希望および保育者効力感　保育士養成研究，27，29-36

（2014年12月３日　受理）